

## 79 誌上発表

『重校補註素問玄機原病式』の  
饗庭東庵注について

木場由衣登

日本鍼灸研究会

曲直瀬玄朔門下の饗庭東庵は劉完素や張從正の医学を重視し、その影響は味岡三伯とその門下に及び、彼らの学統は後に劉張別派と称される。饗庭東庵の著書の中でも、劉河間の『素問玄機原病式』（後『原病式』と略）に注解を施した『重校補註玄機原病式』（後『補註原病式』と略）は、劉張別派の医学をよく表しているはずである。饗庭東庵には『原病式』以外にも『首書十四経』『経脈發揮』『素問標註緒言草稿』などの注解書がある。今回は『補註原病式』の構成と注文中に引用される書目から饗庭東庵の医学背景を知り、当時の劉張別派の医学について考察したいと思う。

『補註原病式』は、慶安3年(1650)の自跋があり、慶安4年(1651)に村上平楽寺より刊行される。『原病式』も江戸初期に流行したらしく、版本の数が多く、真柳誠氏(『和刻漢籍医書集成』第2輯所収『素問玄機原病式』解題)によると、中国でも17種以上の刊本が存在するが、日本でも繰り返し重刊され、元和2年(1616)から宝永8年(1711)年までに11種の刊本ある。江戸初期までに流行した『原病式』であるが、注解本は二種のみであり、饗庭東庵の孫弟子に当たる岡本一抱が、浅井周璞(周伯)の標点した医統正脈全書本『原病式』に鼈頭注(延宝5年(1677)刊本)を加えている。元和から寛永年間の版本と異なり、饗庭東庵、浅井周璞、岡本一抱は医統正脈全書の系統を底本としている。

『補註原病式』は巻末の自跋は慶安3年(1650)であり、慶安4年(1651)に刊行される。構成は全5巻、著者所蔵本は5冊綴りで、各5冊に題簽が有り、外題は『補註原病式』である。扉と見返しはなく、内題は『重校補註素問玄機原病式』である。巻一は「序」「補遺」「目録」が計39丁、巻二から巻五までの「五運主病」が計186丁、巻末に「跋語」が2丁あり、全227丁である。「素問玄機原病式序」(劉河間序)から始まり、細字注にて東庵の注文が附される。大定22年(1182)の程道濟序は無く、「重校補註素問玄機原病式補遺」(全8丁)が附される。この「補遺」は東庵が独自に蒐集したもので、内容は『素問』至真要大論と六元正紀大論の抜粋に注を加えたものである。この後に「重校補註素問玄機原病式例」(4丁)があり、内容は「病機十九条」と六元正紀大論の病證から構成され、この「式例」にも細字注が有る。但し、「式例」の版心題は「目録一卷」と記す。自跋に記載する様に呉勉学の『医統正脈全書』所収本(注文では「正脈」)を底本とし、「旧本」と比較する。この「旧本」は会通館古活字本(元和2年)をルーツとする寛永7年刊本、宝永8年刊本と合う。また「本経」(『素問』)至真要大論や六元正紀大論とも校勘される等、『補註原病式』は校注本としても価値が高い。饗庭東庵は、劉河間序の注に『易』上繫辞、『莊子』、『史記』、『史記正義』、『金史』、『(群書)集事淵海』を引き、『素問』と関係する条文の注解には「次註(啓元子)」、「新校正」、「類註」、「註證」とあり、『類経』と『註證発微』を使用する。医学理論の注には、『病源候論』、『三因方』、『医学綱目』、『本草綱目』、『丹台玉案』、『古今医統』、『類経図翼』、脈診に関する部分では「高陽生」の『脈訣』、『華谷儲泳』、『戴起宗』、『丹溪・朱震亨』、『龍丘葉氏』、傷寒関係では「成無己」、『傷寒論』、『金匱玉函経』の書名が見える。脈状については「孫真人衛生歌」、『蘇氏養生訣』、『李氏十六字訣』で注解する。『説文』、『爾雅』、『方言』、『広韻』、『集韻』等の訓詁音韻系の工具書の書名は見られなかった。『補註原病式』は以上の様な特徴を持ち、饗庭東庵が残した詳細な注解は、『原病式』を読むための重要な参考資料であり、金元医学による病證学研究に是非とも利用すべきである。